

鹿児島県立図書館長・椋鳩十*

中村裕子（学籍番号 200721547）

研究指導教員：黒古一夫

1. はじめに

椋鳩十（本名・久保田彦穂、1905-1987）は動物児童文学のジャンルを確立した一人として広く知られる文学者であるが、その一方では高女の教師でもあり、作家としての業績が評価されて戦後鹿児島県立図書館長に抜擢された経歴も持つ。一般にはあまり知られていないものの、図書館の再建をもって荒廃した戦後社会の復興に寄与し、革新的な図書館システムを構築した図書館長としての功績は、椋鳩十像を慮る上で決して看過すべからざるものである。

にもかかわらず、椋鳩十に関する先行研究の多くは作家論・作品論に偏っている。図書館活動を取り上げたものも見られるものの、多くは事績の評価や活動報告に留まるもので、その背景への言及や人物像の一面としての考察は、未だ不十分なところがある。

本研究は椋鳩十の図書館長としての姿に主眼を置くものであるが、その活動について、館長就任までの経歴や思想といった内的要因、および時代的・社会的背景といった外的要因の双方から勘案し、それらの不可分の関連性を示すことで、彼の図書館活動の独創性・意義を論じることを試みた。加えて、その過程で椋鳩十の人物像を網羅的・立体的に描き出すことによって、椋鳩十がその生涯において展開したあらゆる活動の根底に一貫して潜在する、源泉とも言うべき彼の持論的価値観を探り出すものである。

2. 論文構成

本論は序章から終章まで、字数を約 86,000 とし、正文の部分で 6 章で構成している。序章で研究背景・目的、論文構成内容の概略を示し、終章では椋鳩十の諸活動の根基を成す彼の持論的価値観について総括的に追求している。正文

の 6 章は、内的要因、外的要因、図書館長としての働きの 3 部に大別でき、各部について 2 章ずつ考察している。正文各章の概要は以下のとおりである。

2.1 内的要因（1）：椋鳩十その人

内的要因の 1 として、故郷を離れるまでの多感な幼少年期にあった椋鳩十を取り巻いた環境について、家庭環境、自然環境、師弟関係の 3 点から考察している。幼少年期における体験や環境は人格形成に大きく影響するもので、いずれが欠けても今日の椋鳩十は存在しなかったと言える。この時期における経験は、彼ののちの全ての活動の土台を形成する重要な要素である。

2.2 内的要因（2）：児童文学作家・椋鳩十

内的要因の 2 として、椋鳩十の文学活動を時系列的に追い、社会に対する姿勢について論じている。詩人としてスタートした椋の文学活動は、詩誌同人の共産主義化に伴い、韻文からサンカ（山窩）をテーマとした散文へと舞台を移す。文壇でも高い評価を得るが、過激な作風が戦時下の国家主義に抵触し活動が停滞する。やがて彼のサンカ小説に児童文学の可能性を見出した『少年倶楽部』編集長の勧めをきっかけに、児童向け動物文学の創作に着手する。厳しい言論統制の時代に動物物語の形を借りることで生命の尊厳を象徴的に訴え続けた自由主義的姿勢には、図書館長時代における反権威的行動との関連性を見出すことができる。

2.3 外的要因（1）：鹿児島県立図書館史

椋就任までの鹿児島県における図書館界の動きに注目することで、椋鳩十館長誕生に関わる外的要因たる時代背景についてミクロ的に確認している。4 節構成で、それぞれ主として明治期、大正期、戦時、戦後の動向を取り上げている。鹿児島県立図書館史を考察する前提として日本図書館史にも触れ、図書館界を揺り動かした各時代の姿を包括的に把握するものである。

* “Muku Hatoju as the director of Kagoshima Prefectural Library” by Yuko NAKAMURA

2.4 外的要因(2):文化人図書館長の登場

鹿児島県の動向に主に注目した前章に対し、全国的に蔓延した図書館界の風潮に注目することで、外的要因としての時代の姿をより立体的に把握することを狙いとする。椋鳩十が鹿児島県立図書館長に就任したのは戦後間もない1947(昭和22)年のことである。この時期は、国立国会図書館長はじめ、官界の要職に学者や文化人を起用する風潮が全国的に広まった。これには敗戦のショックから立ち直るため文化国家の建設(その要としての図書館への期待)が叫ばれた背景がある。館長に文化的見識の高い人物を置き、その監督下で専門司書が実務に当たることで、図書館が文化復興と知識情報機関の両役割を担うことが理想とされた。一介の作家(または教師)に過ぎない椋鳩十の館長就任もそうした経緯のもと実現したものであり、時勢を表す最たる例の1つである。本章では参考として、椋鳩十同様図書館長に起用された作家3名—鈴木彦次郎(岩手県立図書館)、中村地平(宮崎県立図書館)、島尾敏雄(鹿児島県立図書館奄美分館)を取り上げ、その活動を追った。

2.5 図書館長(1):図書館長としての試み

県立図書館長はほとんどが2~3年で転任するのが常であった当時の慣行の中、椋鳩十は19年もの間在職しており、彼の図書館活動が人々の期待に答えるものであったことの表れといえる。図書館長として展開した活動の中で特徴的なものについて、4項目—戦禍に崩壊した図書館機能の再建、のちの図書館ネットワークの原型となった鹿児島方式、地方図書館の人材不足を補い文化向上に役立てた千手観音方式、鹿児島県の経済を支える農業の発展とその土台を成す農民教育に寄与した農業文庫活動—に分け、それぞれ確認するものである。

2.6 図書館長(2):椋鳩十と読書

図書館長としての椋鳩十の読書活動、読書論について言及し、彼が「読書」という行為とどのように関わってきたかを論じる。椋鳩十はその図書館活動の中でも、農業文庫を皮切りとした一連の読書活動に特に力を注いでいる。全国的な反響を呼んだ「母と子の20分間読書」運動は、彼の図書館活動の集大成ともいえる。し

かし彼と読書活動の関わりは図書館長としてのものに留まらない。「読書」という行為が成立するには3つのグループ—①図書を生む②図書と人を仲介する③図書を読む—が必要であるが、椋鳩十はそれぞれの立場を作家時代、図書館長時代、幼少年期というような形で象徴的に体験しており、読書行為とは生涯を通して多角的に深く関わってきた人物である。経験的蓄積に基づく椋鳩十の集大成的読書論は、それすなわち彼の人生論とも換言できる。

3. まとめ —椋鳩十の価値観—

図書館長としての椋鳩十の活動は彼がその人生で得た全ての体験の集大成であったといえるが、幼少年期から作家、図書館長まで椋鳩十の姿を追うと、彼の全ての活動は余す所なく「心の炎」という概念を根幹に置いて成立していることが浮き彫りになる。「心の炎」とは、例えば愛や命、絆、感動といったものに象徴される、あらゆる善の精神的エネルギーの塊を意味するものである。幼少期に見た囲炉裏の静かな火のイメージになぞらえたこの「心の炎」は、彼がいかなる立場にあっても活動の指針に置いた観念である。体験の全てを集約するこの価値観は、より立体的な椋鳩十像を語る上で決して欠くことのできないものといえるだろう。

4. 課題

本研究では文化人図書館長の事例を参考情報までにとどめているが、椋鳩十館長の独自性の追求にはそれらの比較検討にまで及ぶ必要があったといえる。また図書館活動を分析評価する手段が内的要因に偏り、かつ肯定的要素のみ着目している点は否めない。ゆえに人物像の立体的描出は完全とは言えず、これを補完するには批判的視点による考察、および外的要因との因果関係への更なる言及が必要である。

文献

- [1] たかしよいち、『椋鳩十の世界』, 理論社, 1982
- [2] 鹿児島県立図書館,『鹿児島県立図書館史』, 鹿児島県立図書館, 1990